

量程度の副詞における主観性

－「けっこう」を中心として－

シエナ外国人大学 小林玲子
kobayashi@unistrasi.it

1. はじめに

本稿で取り上げる副詞は、量と程度の両方を限定するもので、「量程度の副詞」と呼ばれるものである（仁田2002を参照）。仁田(2002)によると、量程度の副詞を含む広義の程度副詞は、純客観的というよりモーダルな傾きをもつと言われている。その中でも特に主観性が強く感じられるものには、程度や量の判断基準を話し手の予想におく「ずいぶん」「けっこう」「わりと」「かなり」などの語がある。これら4語の『明鏡国語辞典』（北原保雄編、大修館書店）の意味・解説を以下に示す。

ずいぶん： 程度がはなはだしいさま。非常に。だいぶ。かなり。〈解説〉多く、案外である、思った以上である、という気持ちをこめて使う。

けっこう： 予想した以上であるさま。極端ではないが、かなりの程度であるさま。

わりと（「わりに」の項の記述）： 思ったよりも。わりあいに。

かなり： 思いのほか程度が大きいさま。相当。〈解説〉よろしいと認める「可なり」から。

「ずいぶん」の「はなだはだしい」という意味記述から、他の語よりも程度が大きいことが感じられ、それに対して「けっこう」は程度が「極端ではない」ということがわかる。しかし、「ずいぶん」と「けっこう」の両項目に「かなり」という言葉が用いられており、違いがわかりづらくなっている。また4語とも「思った以上」あるいは「予想した以上」という語で説明されているが、そういった判断基準になる「思い」や「予想」はすべての語について同じようになされているのかどうかは、辞書の意味記述だけでは理解することができない。

そこで、本稿では上記の4語のなかでも特に日常会話でよく用いられる「けっこう」を取り上げ、話し手の主観性がどのように意味・用法に反映されているか考察していく。

2. 先行研究

2.1 程度副詞における主観性

工藤(1983, 2000)は、程度副詞には、数量性の濃いものから評価性の濃いものまでさまざまなものがあることを説明している。その中で、「けっこう」は評価性の濃い程度副詞の例として取り上げられている。さらに、「けっこう堂々と自分の意見を述べなさい」というような命令文は、情態副詞「堂々と」を限定する用法にも関わらず、非文となることを示し、「けっこう」と結びつくモダリティのタイプには制限があることを示唆している。

渡辺(1990)は、程度副詞の体系を整理するために、判断構造という観点から詳しく観察している。渡辺(1990)によると、程度副詞は発見系と比較系とに対立し、そのそれぞれが非評価系と評価系に二分され、下の図のように体系づけられるという。

	非評価系	評価系
発見系	とても類	結構類
比較系	もっと類	多少類

このうち、「けっこう」に注目してみると、その判断構造と表現性については、次のような例で説明がなされている。

(1) 結構はやっている。

(1)の発話をする場合、話し手には「ひよっとすると客が少ないのではあるまいか」という懸念が、低くみつもる先入観念としてあり、話し手が対象に対して何らかの評価をしていることから、評価系に分類される。そして、「けっこう」の表現性はそういった懸念からの解放、「脱懸念」であるため、心理的に量は「大」の方向へと向かう。そして、「おや、こんなにはやっているのか」という「懸念していたのとは逆の状態」に気がつく、という判断構造をとる。

また、「けっこう」が対象に優性を認めるという意味でプラス評価を与えるものとされている。つまり、(1)や(2)の場合、対象にプラス評価を与えているか、対象の手強さを認めているため優性といえるが、(3)のような例は適切な文として認められないというのである。

(2) 結構難しい問題が出るから注意しろ。

(3) 結構 *つまらない / きたない / 遅い

しかし、渡辺(1990)は後注において、「けっこう」とマイナス評価の語との共起を認める者が少なくないと述べており、筆者も共起を認める立場に立つ。これについては3.2で用例をあげる。

他の副詞をみると、「わりと」の書き言葉で使われる形式「わりに」は「けっこう」と同じグループに分類されている。「ずいぶん」は発見系・非評価系の「とても類」に分類されており、話し手の「驚嘆」を表現すると考えられている。「かなり」は「多少類」に分類されているが、同じ類の他の例は「すこし」「ちょっと」「やや」「いささか」と、量が「小」のものばかりである。思ったよりも量や程度が大きいことを表す「かなり」がこの分類に入るかどうかについては疑問が残る。

2.2 程度副詞をはなれた「けっこう」の用法

蓮沼(2001)は、程度副詞としての「けっこう」についての渡辺(1990)の見方を受け継ぎながら、それを発展させている。渡辺(1990)では、若い世代の程度副詞ばなれの用法として次の(4)の例が挙げられている。

(4) 結構、彼がやったのかも知れない。

このような用法で、「けっこう」は、「予想外のことだが気付いて見れば大いにあり得る、といった気持ちををこめた誘導副詞になり切ろうとしている」と渡辺(1990)は見ている。

蓮沼(2001)は、このような誘導副詞の用法について、実例データを観察したうえで、程度副詞としての「けっこう」の特性と関連づけて次のように説明している。

「けっこう」は、程度副詞としての意味を保ちつつ、句末・文末の主観的表現とむすびついて、「断言はできないけれど、大いにその可能性がある」「案外そんな気がする」といった、話し手の判断や、直感的な印象を述べる発言を誘導する、誘導副詞としての用法を確立しつつあると言ってよいと思う。(p. 288)

また、蓮沼(2001)は、言いよどみや間つなぎに「けっこう」が使用される場合に注目し、これを間投用法として、「言語表現の検索・編集・およびその適切な一例の提示」をしているものと結論づけている。なお、程度副詞の用法、誘導副詞の用法、間投用法の三つの用法の連続

性を示唆するとともに、実際のデータでは、一語が多重の機能を兼務していると解釈できる場合も少なくないと述べている。

2.3 「けっこう」の表す待遇性と聞き手への配慮

蓮沼(2001)は、「けっこう」が目上に対して使いにくい場合について言及している。例えば、他人の作った料理を評して「けっこうおいしい」と言うと、その人の料理の腕前についてあらかじめ低い評価をしていたことが表面に現れてしまい、失礼な発言となるというものである。

一方、日本語構文研究グループ(1991)は、聞き手と違う話し手の考えを言う時に「けっこう」が使われることを説明している。「かなり」にはこの用法がないことから、二つの語を対比して以下の例を示している。

(5) おなかが空けばこんなかたいパンでもけっこうおいしいですよ

(5)' ×おなかが空けばこんなかたいパンでもかなりおいしいですよ

ここでは、「かたいパンはまずいと思っているでしょうが、意外においしい」という意味になり、事前の評価が聞き手側の評価となる。このことから、「けっこう」を用いた発話は失礼な発言となるだけでなく、場面によっては聞き手の認識状態に配慮する発話となるといえるのではないだろうか。

3. 「けっこう」の基本的用法

3.1 分析の方法

「けっこう」の基本的用法は程度や量を限定する用法であり、基本的意味は「予想よりも程度が大きい、あるいは量が多いこと」であるといっていよう。そこで、程度限定と数量限定それぞれの場合に結びつく語のタイプを詳しく提示している仁田(2002)を参考にし、「けっこう」の用例を程度限定用法と数量限定用法に分類した。さまざまな文脈での現在の用法を調べるため、1980年代後半から2000年代までの小説、シナリオ、対談集、会話資料から用例を200例収集した。なお、「けっこう」の後の部分が言いさしになったり他の発話者にさえぎられていたりしているものは省いた。(用例の出典と用例に用いた記号については、本稿末参照)

3.2 程度限定用法

程度限定用法は、200例中129例で全体の64.5%を占めた。共起する形容詞の中では、(6)の例の「うまい」のようにプラス評価をしているか、手強さがあり優性的と判断できる形容詞がほとんどであったが、(7)の「ダメな」のように明らかにマイナス評価の語と共起する例も全体で7例みられた。

(6)8153(16F) トリそばってのけっこううまいんだよなー。 (男)

(7)八木「雑誌とかって、見ながら食べられるものかしら。パターンって 閉じそうになりませんか？」

三谷「だから、小鉢とかを置いて」

八木「押さえ。めくれないように。私は結構ダメなんですよね、イライラしちゃって。

(後略) (気)

(7)のほかにみられた例で共起している語は、「ちっちゃい」「短い」「喧しい」「いい加減な」「アバウトな」「楽な(手の込んでいないという意味でのマイナス評価)」であった。

(8)は様態の副詞「バツサリと」と、(9)では相対名詞「前」と「けっこう」が結びついている例である。

(8)7031(14A) だからー、(髪を)切ったほうがいいですよ、けっこうバツサリと。(男)

(9)8026(14H) それはどれくらい前なんですか。

8027(14I) や、わかんない。

8028(14H) ★けっこう前↑

8029(14I) →1 9←7何年 (女)

(10)、(11)は状態性を表す動詞と結びついている例で、それぞれ、状態動詞「すいて(いた)」、心的活動動詞「こたえる」の程度が予想よりも大きいことを表している。

(10)4919(10C) 来的时候は反対側、けっこうすいてたよ。(女)

(11) たぶん悪気はないのだろう。でも、彼女にそう言われると結構こたえるのだ。(ダ)

3.3 数量限定用法

数量限定の例は、全200例のうち41例と20%をやや上回る程度であった。(12)、(13)は存在動詞「ある」、(14)は「時間がかかる」という表現と結びついて、量が予想よりも多いことを表している。

(12)6090(13C) けっこう、ありますねー、間違いが。(男)

(13) 自転車を押しながら歩く宮田。横を歩く真紀。

宮田「すみません、けっこうあるんですよ。駅から…」

真紀「いえ…すみません…なんか、お言葉に甘えちゃって…」(運)

(14)「法律的なことなったらかんたら言い出すとけっこう時間かかりますよ。(後略)」(ダ)

(15)、(16)は、それぞれ「話す」「飲む」という動きの量が多いことを表す例である。

(15)7042(13B) なんか、[名前]さんよりも、なんだからかんたら##、[名前]さんも、おもしろいけど、[名前]さんは話しかけないと話さないけど、[あだ名]は違うの。

7043(13A) あっ、そーおー↑

7044(13A) あの人、けっこう、話すかと思った。(女)

(16) 僕らはけっこう酒を飲んでた。何杯注文したのかわからなくなるくらい飲んでた。(ダ)

次の(17)で、「けっこう」は、「刺した」という動きの回数の多さを表している。

(17) (日笠が三谷の手相を見ている)

三谷「これもエンピツを刺した跡です」

日笠「結構刺してますね」(気)

3.4 他の副詞との比較

渡辺(1990)によって発見系・非評価系に分類された「ずいぶん」は以下の例とは置き換えられない。認定に個人差があると思われるので、筆者にとって不自然なものに?、不自然さの度合いが高いものには??をつけた。

- (6)' トリそばってのが {??ずいぶん/けっこう} うまいんだよなー。
 (7)' 私は {??ずいぶん/けっこう} ダメなんですよね
 (8)' 切ったほうがいいですよ、 {??ずいぶん/けっこう} バッサリと。
 (9)' どれくらい前なんですか。 {?ずいぶん/けっこう} 前↑
 (11)' 彼女にそう言われると {?ずいぶん/けっこう} こたえるのだ。
 (13)' すいません、 {??ずいぶん/けっこう} あるんですよ。駅から。
 (15)' あの人、 {??ずいぶん / けっこう}、話するかと思った。

「ずいぶん」と置き換えられない文のうち、(6)(7)(11)(13)では共通して文末に「ーのだ」が用いられており、話し手自身が知っている情報や感じていることを聞き手に説明している。このことから、「ずいぶん」の判断基準となる予想は、「けっこう」と違って話し手だけのものであり、聞き手の予想を含まないことがわかる。また、(8)の「ーほうがいいですよ」という助言、(9)の質問、(15)の発話時以前の想定、などという話し手にとって不確かな内容の発話には「ずいぶん」が用いられない。

一方、「わりと」と置き換えられない例には次のものがある。

- (8)" 切ったほうがいいですよ、 {?わりと / けっこう} バッサリと。
 (9)" どれくらい前なんですか。 {?わりと/けっこう} 前↑
 (16)" 僕らは {?わりと/けっこう} 酒を飲んでいて。何杯注文したのかわからなくなるくらい飲んでいて。

(8)の「バッサリと」や(16)の「何杯注文したのかわからなくなるくらい」というように、量や程度が極限に近い(大きい)場合は「わりと」が共起しにくくなるといえる。(9)では、「前」という語と共起できないのではないことは、「わりと前の話になるが…」などという発話が可能であることからわかる。「わりと」は質問文で用いられないのではないだろうか。ほかの質問の例(18)をみても、「けっこう」は「わりと」と置き換えることができない。

- (18) 西田「……『バースデーブック』って知ってますか」
 三谷「あ、あの、誕生日別の」
 西田「そうそう」
 三谷「占いとか載ってる」
 西田「読んだことありますか、自分の」
 三谷「あります」
 西田「結構当たってましたか」 /?? 「わりと当たってましたか」
 三谷「ええと、……覚えてない」
 西田「……私の、当たってたんです。(後略)」 (気)

「けっこう」が(18)のような質問文において用いられる場合、「当たっている」ほうに話し手の予想が大きく傾いている一方で、聞き手側の情報である「当たっている」が間違いであるかもしれないという一種の懸念が表されているといえよう。渡辺(1990)では、「わりと」は「結構類」に分類されていた。しかし、「わりと」はこのような懸念を表すことなく、話し手の予想と実際の様子や実際起こりうる様子とを比較する意味を持つのではないだろうか。

「かなり」は(6)～(17)すべての例と置き換えが可能であったことから、程度や量を限定する基本的用法では、話し手の予想と実際の状態との関係にあまり制限されることなく用いられる形式であるといえる。以下、4つの語の意味をまとめてみる。

- ・「けっこう」… 話し手が聞き手と共有している場や文脈から当然予想される状態よりも程度が大きい（量が多い）ことを表現する。また、予想には話し手の懸念も含まれている。
- ・「ずいぶん」… 話し手自身の予想と現実の状態が異なること（予想より大）を発見した場合の話し手の驚きを表現する。
- ・「わりと」… 話し手が予想している時点での程度は、他の表現に比べて低く、程度や量が極限に近い場合には用いられない。予想と実際に成立している（成立しうる）様子を比較する意味合いがある。
- ・「かなり」… 極限には到達しないが、程度が大きい（量が多い）。ほかの3つの語に比べると、「予想」と実際の様子との違いにあまり言及することがない。あるいは、予想が潜在的なもので、表面に現れていないといえる。

3.5 程度限定と数量限定という二分類の限界

今回収集した用例の中には程度限定にも数量限定にも分類できないような例が30例あった。例えば次の(19)で、「けっこう」は「やる（山に登る）」ということの実現可能性の高さを表しているように思える。

(19)「けどね、悠ちゃんみたいなのが結構やっちゃうんだよ」

悠木は舌打ちした。

「やっちゃうってどういうことだよ？」

「登っちゃうってことさ」

話は山に戻っていた。

「普段冷静な奴に限ってね、脇目もふらず、もうガンガン登っちゃうんだ。（後略）」

(ク)

なお、以下のように、純粹程度の副詞「とても」とも量の副詞「いっぱい」とも置き換えられないことから、程度を限定しているのでも量を限定しているのでもないことがわかる。

(19)' けどね、悠ちゃんみたいなのが {??とても/??いっぱい} やっちゃうんだよ

3.4でみたほかの量程度副詞と置き換えてみると、「わりと」とだけは置き換えることができた。

(19)" けどね、悠ちゃんみたいなのが {??ずいぶん/??かなり/わりと} やっちゃうんだよ

「けっこう」は、このような用法で程度性・量性を薄くし、「予想外に」「予想される状況とは違って」という意味を強く表していると考えられる。「わりと」は、「予想と比較すると、それとは違って」という意味を持つので、置き換えが可能なのではないだろうか。

4. 「けっこう」のモダリティ副詞への傾き

話し手の「予想」を表すモダリティの副詞には、「案外」や「意外に」などがあり、3.5でみたような「けっこう」の用法は、こういったモダリティ副詞のはたらきに近づいてきているのではないかと思われる。

モダリティ副詞的な用法では、「けっこう」が程度や量を表す語だけでなく、命題内容全体にかかっていっている。次の(20)、(21)を見てみよう。

(20) 27(C4) けっこう、市って言うだけに {笑い} 逆にさみしいって言う (会)

(21) 2483(05 I) けっこう、わ、わけたほうが、あの一、てまもお金もかかるのね。 (女)

(20)では、「さみしい」という程度性を持つ語がみられるが、その一語だけでなく、「市って言うだけに逆にさみしい」という内容全体にかかって、「市と言うとにぎやかな状態を想像するだろうが」という「予想外」の意味を表しているといえる。(21)では、「てまもお金もかかる」という量を表す語があるが、「わけたほうが手間もお金もかかる」という事態が実現する可能性が予想とは違って高い、という意味に解釈するのが自然だろう。

3.3で数量限定用法に分類した(15)の例は、蓮沼(2001)では、「思う」という話し手の判断を引き出す誘導副詞の用法として分類されている。

(15) 7044 (13 A) あの人、けっこう、話するかと思った。 (女)

「けっこう」が「話す」にかかっていくと考える場合、「実際の様子と違って話をする量が多い」と思った、という数量限定の用法として解釈できる。しかし、「けっこう」が「思った」という表現とより強く結びついているという見方をすれば、実際の様子と違って、話し手は「あの人話する」と思い込んでいた、という解釈も可能となるのである。しかし、(22)の例では、「けっこう」は「思う」という表現と共に起しているものの、「いい」との結びつきのほうが強く、程度を限定しているように見える。

(22) 響子「……結構いいと思うんだけどな……」 (リ)

このように「けっこう」の用法には、程度性・量性が強く表れているものからモダリティ副詞のほうに大きく傾いているものまでさまざまなケースがあると考えられる。

では次に、「けっこう」のモダリティ副詞的な用法では、文末にどのような形式が共起するのか見てみたい。

(19)の「結構やっちゃうんだよ」の「ーちゃう(ーてしまうの縮約形)」のほか、「ーなる」など、物事が自然とある結果に向かうことを意味する表現がみられた。(23)、(24)、(25)は、その例である。

(23) 十朱「(前略)やっぱりパンでもいいから、部屋で一人で食べようと思ったら、元旦は特別メニューでルームサービスがないの。で、結構我慢しちゃうんです」 (気)

(24) 309(S1) あでも作るのはけっこう二人前って言う量になるよ (会)

(25) 1320(03A) 特に看板とかってけっこう、何か所かつけるうち、基本的にデザインって一緒になるじゃないですかー↑ (男)

また、(19)(23)にも見られるように「のだ」という話し手の判断を伝える形式も現れやすい。(26)、(27)は「のだ」が現れている例である。

(26) 1246(03A) ジャイアンツの人って、けっこうみんな気さくに書いてくれんだけど一、清原だけはね一、ぜんぜん書いてくれなかったって一。 (男)

(27) 三谷「結構、なんでもこなすんですけど。対談以外は」 (気)

さらに、物事の性質や傾向をゆるやかに限定していくような用法もみられた。共起する形式は、「ような」「みたいな」「ってゆう方向」「ってゆうのかしら」など多岐にわたっている。

(28) 636(02 A) けっこうわたしが、み、いつも泊まるような。 (女)

(29) 7616(15A) なんかー、今けっこう、[社名]の人からー、そのー、ぼくの友達のコンピューターの会社の社長もー{うん (15C)}、えー、ベンチャーのほう始めてみないか、みたいなこといわれてるらしいんですけどね。(男)

(30) 4424(09A) これねー、なんかあの学年でー、(はあ、はあ、はあ 他者(男)) けっこう基準をつくるってーゆう方向で、うん。(女)

(31) 11260, 19A けっこう重ね塗りってゆうのかしら。(女)

(28)～(31)の用法では、(19)や(23)～(27)の例とは違って「予想」という性質が薄れ、「ある程度こんなふうには性質や傾向を限定できる」というような意味が表されている。

こうしてみると、「けっこう」と結びつく文末モダリティのタイプは一定ではなく、「けっこう」は文末との呼応関係を持つという意味でのモダリティ副詞(渡辺1990での誘導副詞)にはなりきっていないのかもしれない。しかし、「けっこう」を文頭に用いることで、これから述べる命題内容について、話し手が何らかの態度を伝えていることは確かであろう。それは、命題内容が予想とは違うということであったり、あるいは何か一定の方向性を持った意見を表明しようとする態度だったりする。また、文頭だけでなく文中においても、「けっこう」は次に行う言語行動(評価、意見表明など)を聞き手に知らせる談話標識的な働きをしていると考えられるが、間投詞的用法の分析については稿を改めたい。

5. 待遇性や聞き手への配慮と関わる用法

「けっこう」と関わる待遇性について理解するために、次の例(32)を見てみよう。

(32) 三谷「古い話になりますけど『古畑(仁三郎)の時は、どうもありがとうございました』

桃井「ありがとうございました。すごい面白かった。あれ、すごいよかった」

三谷「僕もビデオで観返して、ああ、結構面白いなって」(気)

話し手桃井が、聞き手三谷の作品「古畑(仁三郎)」を評価する場合は、「すごい面白かった」という言い方がなされている。これを「結構面白かった」に置き換えると、相手の作品を低く評価していたことが表れてしまい、失礼な発言となる。しかし、三谷が自分自身の作品を評価する場合には、「前はそんなに高く評価していなかった」という謙遜の気持ちを込めて、「結構面白いな」という表現になっている。この例は、蓮沼(2001)の議論を裏付けるものである。しかし、以下の例(33)、(34)では、話し手三谷が聞き手の行動や性質について「けっこう」を用いてコメントしている。

(33) パー子「(前略)『ダウンタウンDX』の“有名人だじゃれレース”に出る時に、相方

(アチラ)が考えた五つくらいのネタを聞いて、『お兄ちゃん、「お正月に松ちゃんと浜ちゃんが車にぶつかってダウンタウン」がいいと思うけど』とか言うんですよ。そしたらちゃんと採用されて、しかも一位になっちゃったりして。そういうのは分かるんですけども自分ではできない」

三谷「結構賢い奥さんて感じですね」(気)

(34) 三谷「……以前、『ジャングルTV』にゲストで出てらっしゃるのを拝見したんですが、出演者の方を次々にモノに例えてたじゃないですか。あれには結構、感銘を受けました。関根(勤)さんを『靴』に例えたりとか」

鈴木「あはははは、靴っぽいですよね、関根さんて」(気)

(33)では、聞き手であるパー子は話し手三谷よりも年が上である。また、(34)は初対面の対談であり、三谷は年下の鈴木に対して丁寧な言葉遣い（「出てらっしゃる」「拝見した」）を使っている。では、なぜこのような用法が認められるのかということ、上の二つの例では、話し手は断定的に評価を述べてはおらず、「〜て感じですね」「感銘を受けました」というように自分側の心的活動や感じ方を述べているからだと考えられる。同じ場面で「結構賢い奥さんですね」とか「あれは結構面白かったですよ」とか言ったら、上からものを言っているような印象を聞き手に与えてしまうだろう。

一方、聞き手と異なる話し手の考えを述べる場面では、「けっこう」を使うことによって、「あなたとは認識が違うけれども」という注釈をつけることができる。(7)がその例である。
(7) 八木「雑誌とかって、見ながら食べられるものかしら。パターンって閉じそうになりませんか？」

三谷「だから、小鉢とかを置いて」

八木「押さえ。めくれないように。私は結構ダメなんですよね、イライラしちゃって。

（後略）」 (気)

このように聞き手との認識状態に対立がある場面で、「けっこう」の代わりに「かなり」「本当に」「まったく」などという語を使えば、聞き手との対立を際立たせてしまうだろう。次の例(34)では、話し手高田が、はる子に対して怒っている美紀をなだめている。その際「けっこう」を用いて、「美紀はそう思わなかったかもしれないが」という話し手の考え方を伝えることにより、対立を回避している。

(34) 美紀「（前略）今日だってリンス補充してなかったし、相変わらずタオル足りなくなるし」

はる子「でもちゃんと間に合わせました。私なりにやってるつもりです（と、ひるまない）」

高田「（困って）そうだよ、今日は結構たて込んでたし」 (せ)

以上のような例の観察から、「けっこう」と関わる待遇性について次のようにまとめることができる。

- ・聞き手に対してプラス評価をする場合、結構を用いた断定的な評価の発話は、特に目上や距離のある聞き手に対して避けられる。
- ・聞き手と異なる話し手の認識について述べる場合、「けっこう」の使用は対立を緩和する効果を与える。

6. おわりに

量程度の副詞「けっこう」に表れている話し手の主観的態度は以下のようにまとめられる。

- ・判断基準：話し手が聞き手と共有している場や文脈から予想される状態
- ・程度：予想よりも大
- ・表現意図（拡張用法において）：命題内容によって表される状態や出来事が予想に反して実現されていること、または予想よりも実現可能性が高いことを表す
- ・聞き手の認識への配慮：聞き手と認識が異なる場面では、対立を緩和する効果がある

本稿で詳しく見ることができなかった間投用法や、「案外」などの予想外の気持ちを表すモダリティ副詞との関係については、今後の課題としたい。

【参考文献】

- 浅野百合子(1983)「程度副詞の分析—ずいぶん・だいぶ・なかなか・相当・かなり—」『日本語教育』52
- 木下恭子(2001)「比較の副詞『もっと』における主観性」『国語学』52-2
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐる」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩著『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- 中山恵利子(1996)「程度副詞分類の試み—その程度・量・基準により—」『阪南論集 人文・自然科学編』31(3)
- 日本語構文研究グループ(1991)『日本語、こんなときどうする? Vol. II 副詞篇』凡人社
- 蓮沼昭子(2001)「談話における『けっこう』について」『日本語の伝統と現代』刊行会編『日本語の伝統と現代』和泉書院
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 森田良行(2006)『話者の視点がつくる日本語』ひつじ書房
- 渡辺実(1990)「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23

【用例出典】

- 小説 (ク)『クライマーズ・ハイ』横山秀夫 2006 文春文庫(2003年刊行)
(ダ)『ダンス・ダンス・ダンス』上下 村上春樹 2004 講談社文庫(1988年刊行)
(四)『四日間の奇蹟』浅倉卓弥 2004 宝島社文庫(2003年刊行)
- 対談集 (気)『気まずい二人』三谷幸喜 2000 角川文庫(1997年刊行)
- シナリオ (運)「運命じゃない人」『年鑑代表シナリオ集'05』2006 シナリオ作家協会
(せ)「せかいのおわり」『年鑑代表シナリオ集'05』2006 シナリオ作家協会
(リ)「リンダ リンダ リンダ」『年鑑代表シナリオ集'05』2006 シナリオ作家協会
- 会話資料(会)2000年に筆者が録音収集・文字化した会話資料:職場の同僚・上司との雑談
(女)『女性のことば・職場編』現代日本語研究会編 1997 ひつじ書房
(男)『男性のことば・職場編』現代日本語研究会編 2002 ひつじ書房
- 『女性のことば・職場編』および『男性のことば・職場編』で録音資料の文字化の際に用いられている記号は、以下のとおりである。
- 8153 初めの4桁の数字は発話番号を表す
(16F) 発話番号に続いて発話者記号を()の中に示す
↑ 上昇イントネーション
★ 発話の途中で次の話者の発話が始まった場合、次の話者の発話が始まった時点
→ ← 前の話者の発話に重なった部分の始まりと終わり
{ } 発話途中の聞き手のあいづちを{}に入れて示す
< > 発話以外の行動を<>の中に示す。〈言いさし〉〈笑い〉〈沈黙〉など
[] 個人名、企業名などを伏せた場合、伏せた内容を[名字]のように示す。
聞き取り不明の箇所